



多様な働き方改革を目指して

慶應義塾大学商学研究科教授 鶴 光太郎

働き方改革がブームである。政権の最重要政策として位置付けられ、時間外労働の上限規制導入などの歴史的な改革も進み、民間企業においても働き方改革への機運が高まっている。一方、働き方改革とは単に残業時間を削減すればいいのかという疑念の声もでてきている。仕事の内容やプロセスを改め、時間当たりの生産性を高めない限りは、必ずどこかにしわ寄せがいつてしまう。強制退社など企業横並び的、画一的、しかも「やってる感」をアピールするだけの取り組みでは企業と従業員はウィンウィンの関係を築くことはできない。雇用システムはそれ自体様々な仕組み、制度から成り立っており、それらの制度補完性を考えれば、一部だけ取り出してそれを無理やり変えることは難しいからだ。

本書は、長時間労働問題、非正規雇用処遇問題を含め、多くの懸案の雇用問題の根底には、正社員の働き方、すなわち、職務、勤務地、労働時間が限定されない無限定正社員システムがあると考え。ここが変わらない限り、日本の働き方に大きな変革は生まれまいであろう。しかし、やっかいなのは、無限定正社員システムは法律で規定されているわけではないことだ。したがって、政府ができることはおのずと限られる。人々の意識、制度の根幹にある「共有化された予想」が変わらない限り、その変化は望むべくもないのだ。だからこそ、ジョブ型正社員のデフォルト化、ICTの徹底活用も含めライフサイクル・スタイルに応じた多様な働き方を安心して選択できるような改革を民ベースで時間をかけながら地道に進めていくしかないと思う。

本書は、「日本の働き方をいかに変えるか」をテーマとして、過去 10 年近くに渡って、主として RIETI において取り組んできた研究を総括したものである。そこでは自分が関わった研究や内外の研究に立脚し、「エビデンスに基づいた政策」を提言する、中でも現実の法律をどう変えていくかまでも射程にのらせた具体的な改革を明示することを心掛けたつもりだ。今回の受賞は身に余る光栄であり、これまでお世話になったすべての方々に改めて感謝の意を表すとともに、この受賞を励みとし今後とも更なる研鑽を積み重ねてまいりたい。

つる こうたろう

84 年東京大卒、03 年オックスフォード大より博士号（経済学）取得。OECD 経済局エコノミストなどを経て、12 年より慶應義塾大大学院商学研究科教授。60 年生まれ。

